

## コミュニケーション論とコーチング理論の複合による 高校・大学での倫理学授業の再構築

著者	五十嵐 沙千子
発行年	2013
その他のタイトル	Potentiality of Communication Theory and Coaching Theory in Teaching Method
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/120772">http://hdl.handle.net/2241/120772</a>

# 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 27 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2012

課題番号：22520008

研究課題名（和文）コミュニケーション論とコーチング理論の複合による高校・大学での倫理  
学授業の再構築研究課題名（英文）Potentiality of Communication Theory and Coaching Theory in Teaching  
Method

研究代表者

五十嵐 沙千子 (IGARASHI SACHIKO)

筑波大学・人文社会系・准教授

研究者番号：10365992

研究成果の概要（和文）：従来、教育学の分野では「対話的授業」の方法論が研究及び実践されてきたが、それは特別活動やグループ活動の枠内でしか用いられず、限界のあるものとなっている。なぜそうなるのかをハーバーマス理論から明らかにし、さらに、新たにハーバーマスのコミュニケーション論にハイデガーの視点を援用することで、具体的に授業を「対話」として再構成するための方法論を「哲学カフェ」としての方法論として確立した。

研究成果の概要（英文）：The theme of this research is potentiality of Habermas's communication theory and coaching theory in teaching method of the high-school and the university. It's necessary to enhance the communication-scene in school that we must use "Socratic Dialogue" by Habermas and Martin Heidegger.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合 計
2010年度	600,000	180,000	780,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
2012年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総 計	1,800,000	540,000	2,340,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学、哲学・倫理学

キーワード：コミュニケーション、哲学カフェ、対話的授業、ユルゲン・ハーバーマス、マルティン・ハイデガー、コーチング理論、中等・高等教育、教師と生徒の関係性

## 1. 研究開始当初の背景

研究の必要性及び研究当初の背景としてあげられるものは以下の2点である。

まず、教育学および教育研究の領域において、対話的授業の研究はさまざまになされてきたが、それにもかかわらず依然としてその実効性を高めるメルクマールやシステムの全体性は明確にはなっていない。とくに倫理学や「倫理」または哲学の授業は、その学問

領域の性質上、一方的な知識授受のものではなく対話的であることが必要である。そこで、これまでに様々に模索されてきた「対話的授業」を「教師・生徒」の関係から問い直し、その授業が「対話的」と言えるかどうかについての検証理論を構築する必要性があった。

「対話型授業」それ自体は、国内でも注目されている。だが、その多くは、教師による一方的な授業のなかの一ツールとして使われるにとどまり、決して対話それ自体が授業を構

成する母体になっているわけではない。実際にいろいろな授業に参加したが、授業者たちからも「なかなか生産的なコミュニケーションの場が作れない」という悩みをよく聞いた。つまり「対話型授業」の方法論は確立されていないのである。

第二に、教育学におけるハーバーマス研究の状況があげられる。

ハーバーマスに関する理論的研究は数多いが、それを授業論として応用可能な実践的研究にした例は、国内・国外を問わず、本件記ゆいゝが異には存在しない。

ハーバーマスを教育の理論として取り上げる先行研究としては、東京大学の今井康雄氏を中心としたポストモダン教育学の文脈でのものが主要なものとしてあげられるだろう。しかし、それらの研究は、ハーバーマスの理論を教育学者が論じたというものとどまり、具体的な授業論として展開されているものではない。

いずれにしても、現状の教育現場、とくに授業のなかで、生徒の主体的授業参加や主体的思考力が求められ、そのために対話的授業の必要性が明らかであるにもかかわらず、それが現実に実効性のあるものとしてはほとんど結実していないということ、さらに、その点においてハーバーマスのコミュニケーション理論を用いることが非常に有効であるにもかかわらず、実践面での汎用可能なかたちでのコミュニケーション理論研究が行われていないということ、この2点が、本研究を開始する際の背景であり、また、本研究が必要であると考えた理由である。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、先にも述べたとおり、一言で言えば、中等・高等教育の倫理(学)の授業における「対話的授業」の成立の要件を明確にすることと言えるだろう。

より詳しく言えば、本研究の目的は、ユルゲン・ハーバーマスのコミュニケーション論にコーチング理論を統合し、そのことを通して高校・大学の倫理(学)授業における「対話的授業」の方法論を確立し、この「対話的授業」を、一般の倫理教育、哲学・倫理学教育の現場で誰にでも応用可能なコミュニケーションの技術論として提示すること、さらに、そのことを通して中等・高等教育における倫理教育(高等学校)、哲学・倫理学教育(大学)の授業空間を反省・再構築する理論を構築することにあった。

さらに、この「対話的授業」形式に基づく授業実践を通して、現場の教員が共同で、授業を対象化し反省する場の構築を目指したいと考えていた。これらの「対話的授業」の理論化と実践研究を通して、コミュニケーション的で完全に双方向的な哲学・倫理学教育の形を

作り上げていくことが本研究の目的である。

本研究は、(1)ユルゲン・ハーバーマスのコミュニケーション論を「対話的授業」理論として理論化する、(2)さらにそれをコーチング理論と統合することによって、中等・高等教育の哲学・倫理学授業に生かす、と言う二つの柱から成り立っている。

まず、(1)について述べると、ハーバーマスに関する理論的研究は数多いが、それを授業論として応用可能な実践的研究にした例は、国内・国外を問わず、本研究以外には存在しない。

「対話型授業」それ自体は、国内でも注目されているが、しかし、その多くは、教師による一方向的な授業のなかの一ツールとして使われるにとどまり、決して対話それ自体が授業を構成する母体になっているわけではない。実際にいろいろな授業に参加したが、授業者たちからも「なかなか生産的なコミュニケーションの場が作れない」という悩みをよく聞いた。つまり「対話型授業」の方法論は確立されていないのである。

私はもともとハーバーマス研究者であるが、彼のコミュニケーション論を実際に大学等の授業に用いることで、前任校の東海大学では1500人の教員中での最優秀授業賞を獲得し、また現勤務校である筑波大学でも「哲学カフェ」の主催、9月には文科省のサイエンスカフェを行うなど多大な成果を挙げることができた。

これらの成果は、ハーバーマスのコミュニケーション論の裏付けがあったからに他ならない。だとすれば、ハーバーマス理論によって、「哲学カフェ」としてのコミュニケーション形式を理論化し、実践化すること、さらにそれを中等・高等教育の現場での授業の方法論として構築していくこと(2)は非常に重要である。

## 3. 研究の方法

まず、第一に、ハーバーマスのコミュニケーション理論の教育への応用可能性について、理論研究を進める必要がある。ハーバーマスを教育の理論として取り上げる先行研究としては、東京大学の今井康雄氏を中心としたポストモダン教育学の文脈でのものが主要なものとしてあげられるだろう。しかし、それらの研究は、ハーバーマスの理論を教育学者が論じたというものとどまり、具体的な授業論として展開されているものではない。

「対話的授業」の本質論およびその要件に関してはユルゲン・ハーバーマスのコミュニケーション論に基づいて理論構築しなければならない。しかも、それを具体的な授業論として扱う上で、ハーバーマスの理論の中から、授業での対話の室を分析する基準を提出し、さらに、より明確で

どのような授業者にも使用可能な理論とするために、近年注目を集めているコーチング理論を用いて、その視点を統合することでその実践上の具体化を図った。

こうして理論上の作業仮説を作成するとともに、この作業仮説を用いた実際の授業を具体的実践として数多く行い、それらの試行を通して、あらためて作業仮説にフィードバックしていくことが試みられた。

その過程で、ハイデガーの言語論的転回の理論を補強理論として用いる必要があることが明らかになり、あらためて、ハーバーマスの理論とハイデガーの言語論的転回の理論をともに対話的授業構築の理論として構成すること、さらに構成された理論を実際の授業現場で実践し、分析を続けていくという方法が採用された。

#### 4. 研究成果

本研究の目的は、ユルゲン・ハーバーマスのコミュニケーション理論を基に、さらに近年注目を集めているコーチング理論を統合し、現在の倫理教育(高等学校)・倫理学教育(大学)の授業空間を反省・再構築する理論を、一般の倫理教育・倫理学教育の現場で、誰にでも応用可能なコミュニケーションの技術論として提示することであった。その際、単に理論的研究にとどまることなく、実際の倫理教育ないし倫理学教育の授業理論を構築することを目指した。

研究の初年度には、現在行われている高校・大学での倫理教育・倫理学教育の授業分析を、主にユルゲン・ハーバーマスのコミュニケーション理論に基づいて行った。

一言で倫理(学)の授業と言っても、大きく分けると、現状では、思想史を教える知識伝達型の分野と、現代社会の諸問題を取り上げて、学生・生徒自身に考えさせる体験型の分野に分かれている。

いずれの形式においても、倫理(学)においてはとりわけ知識の一方通行型=知識注入型授業形式ではなく、対話型の、つまり生徒が主体的に考え、参加できる授業厚生が求められている。だが、現実には、授業の中でこうした生産的な対話がなされている例はほとんど無く、また、仮になされていたとしても授業のごく一部で用いられているだけで、授業全体が対話によって構成されているという例は全く見られなかった。

初年度では、作業仮説として、これらの授業実践ないし授業理論を分析する視点として、ハーバーマスのコミュニケーション理論の中からとくに重要な2点を基準として提出し、分析の視点として用いた。その結果、ハーバーマスの基準から反省すると、現在行われている「対話型授業」は、実は「対話を目指すコミュニケーション的行為」ではなく、むしろ「道具的コミュニケーション」である

こと、その中では真に対話が目指されているわけではないと言うことが明らかになった。このことを通して、対話型授業分析の視点としてコミュニケーション理論による作業仮説の有効性が明らかになった。

こうした分析をもとに、本研究期間2年目は、このハーバーマスのコミュニケーション理論をもとに、さらにコーチング理論によって、具体的に、実際の授業のなかでの「対話」の構造化をすすめた。その結果、「対話」を進める授業が、「対話」を目指してはいても、実際に「対話型」=「コミュニケーション型」にならず、教師の側の「目的合理的行為」として構成されてしまっているということ、さらに、それはコーチング理論においても同様であることが明らかになった。その原因は、「教師」と「生徒」という縦の関係性ないし役割が対話の中に自明なものとして持ち込まれ、対話の構造化を阻害しているからではないかという仮説が立てられた。だとすれば、この授業内部の関係性ないし役割の持ち込みを、コーチング理論の提示する関係論によって組み替えることは不可能である。すなわち、コーチング理論では、先に述べた関係性の反省がなされるどころか、むしろその関係性を対話の構成要素としてシステムの中に組み込んでしまうという可能性があるのである。

こうしたコーチング理論批判は、単にハーバーマスの理論からだけではなく、実は、ハイデガーの言語論的転回の思想を踏まえることではじめて明確になる。

ハイデガーの言語論的転回の思想とは、われわれの世界認識やわれわれの実践を縛っている「柵」とは、まさにわれわれが暗黙のうちに自明視している言語的世界において与えられるものであり、それをわれわれ自身は通常は、明示的には意識することも反省することもできないというのである。見えない柵としてわれわれを束縛的に構成しているこの枠組みを目に見えるようにすることこそ、高校・大学での倫理学授業の大きな目的である。つまり、授業を縛っている関係性を明確に取り出し、反省し、脱構築するという目的のためにも、また同時に、われわれの置かれた世界の自明性を反省するという倫理(学)授業の目的を達成するためにも、ハイデガーの言語論的転回の考えを用いることは、必要かつ不可欠なのである。むしろ、ハイデガーのこうした理論をハーバーマスのコミュニケーション理論の補強として使うことによって、高校・大学での倫理(学)授業の再構築は実り豊かな、実効性のあるものになるのである。

それを踏まえ、研究最終年度は、再びハーバーマスのコミュニケーション理論に依拠しつつ、同時に、ハイデガーの言語論的転回

の理論を通して関係性の脱構築を組み合わせることを通して、コーチング理論や従来の教育学の枠組みでの対話型授業研究の限界を克服する授業のコミュニケーション化を、「哲学カフェ」という形式によって構造化した。この「哲学カフェ」の形式での授業構成がいかに可能か、換言すれば、「哲学カフェ」の形式でいかにコミュニケーション論的授業構築ができるかを、実際の授業の中で試行的に実践しつつ、より実践的で有効な授業論を展開できるか、高校・大学および中学でのさまざまな授業実践および一般市民を対象とした「哲学カフェ」における対話研究を中心に展開した。

とくに「哲学カフェ」という形での授業は、それが「教室」と「カフェ」という全く異なる空間、規範、関係性を要求するものであり、そこで要求される場作りが、誰の目にもコミュニケーションのルールの変更を要求する明示的なものであるということもあいまって、対話的授業構成の理論としては、非常に汎用性の高いものであることが明らかになった。ここで注目すべきであるのは、この「哲学カフェ」の形式における授業では、授業者が、とくに高いファシリテーション能力を有するものではなくても、また、授業実践の経験の多寡にかかわらず、誰でも一定程度の有効な対話型授業が展開可能であるということである。

実際に中学から大学まで、あるいは一般市民を対象として行われたさまざまな実践を通して、いろいろな能力・経験・年齢等の多様な授業者が介在したが、どのような場合でも、またどのようなテーマでも、そうした外的条件に関わらず、授業者の個人的能力に依拠しない一定程度の高い対話的授業が成立したことは、多くの現場の教員達から驚きをもつて迎えられた。

今後は、この理論をいっそう精緻化し、さらに実践を数多く積み重ねることを通して、確立していきたいと考えている。

三年間という限られた期間ではあったが、本研究を通して、従来、研究及び実践されてきた「対話的授業」の本質と限界をハーバーマス理論から反省的に明確にすることができた。さらに、新たにハーバーマスのコミュニケーション論にハイデッガーの視点を援用することで、具体的に授業を「対話」として再構成するための方法論を「哲学カフェ」としての方法論として確立することができたことは、非常に大きな成果であるということができる。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線)

〔雑誌論文〕(計 5 件)

- ① 五十嵐沙千子、逃げ道---ハイデッガーの関、哲学・思想論集、査読なし、第 38 号、2013、49-58
- ② 五十嵐沙千子、私は多くの兵隊を、哲学・思想論集、査読なし、第 37 号、2012、178-193
- ③ 五十嵐沙千子、一つの逆接詞と二つの「従う」をめぐって、哲学・思想論叢、査読なし、第 30 号、2012、15-32
- ④ 五十嵐沙千子、手、倫理学、査読なし、第 27 号、2011、31-43
- ⑤ 五十嵐沙千子、「精神」について、哲学・思想論集、査読なし、第 36 号、2011、17-40

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

五十嵐 沙千子 (IGARASHI SACHIKO)

筑波大学・人文社会系・准教授

研究者番号：10365992